

# 大阪女学院中学校・高等学校 2025年度自己評価

## 1. 【形式と方法】

### (1) 調査と評価の方法

Google Form による無記名調査アンケートを、生徒、保護者、教職員に実施し、その回答結果を、大阪女学院2025年度事業計画書にある、中学校・高等学校事業計画の事業方針及び重点課題に即して項目化、各項目について達成度を分析した。

### (2) 参照と分析

報告にあたり、以下のデータ等を参照した。

- ①学院の収支決算報告書
- ②大阪私立中学校・高等学校連合会の報告書
- ③中学校・高等学校の各種報告データ

## 2. 【概況】

### (1) 2025年度を振り返って

#### A 5日制導入と土曜日の選択型活動

中高の教育課程における正規の授業を、月曜日から金曜日の週5日に収めて実施するカリキュラム改変を実施し、土曜日は、高校1年以外は正規授業を行わず、生徒が選択して受講できる講座に参加する形とした。

教員・職員は、原則土曜日は休日とし、前年まで実施していた専任教員及び常勤講師の研修日制度（教員が日曜日に加えて任意の週日に1日休業日を設定する制度）を廃した。

#### B 探究活動の充実

高等学校の総合的な探究の時間の2単位については、生徒の自主的な課外活動を中心とし、その成果を秋の探究フェスで発表する活動を展開してきたが、高校1年の1単位については、土曜日に担当教員のファシリテーションによる教育活動を展開することで実施し、この活動の発表と報告の日を設け、全校教員及び保護者に発表する場とした。

#### C 高大接続事業の拡充

協定校提携を、キリスト教教育を実践する大学、キリスト教に基づく女子教育を標榜する大学と締結しており、これまでに関西学院大学、神戸女学院大学、同志社女子大学と、長きにわたって高大連携に取り組んできたが、2024年には、新たに東京女子大学と協定校として高大連携協定を締結した。2024年9月25日、東京女子大学において調印式を行い、東京女子大学より、森本あんり学長以下、副学長、高大接続担当教

授が、本校からは、山崎哲嗣校長及び副校長が出席した。それを受け東京女子大学協定校推薦を開始し、8名の高大接続推薦枠を設けた。

#### D 海外大学との提携拡充

台湾の実践大学、カナダのトリニティー・ウェスタン大学、テンプル大学日本キャンパスとの高大連携として、MOU(Memorandum of Understanding)を締結していたが、この2大学に加えて、ニュージーランドのマッセイ大学、アイルランドのグリフィス大学、台湾の文藻外国語大学とMOUを結び、海外大学とのスムーズな進学連携の可能性を拡大した。

#### E 中学生が参加する大学訪問事業

東京女子大学と高大連携協定を締結したことから、同大学を訪問するツアーを企画し、これには、中学3年生を参加対象に加えてして実施した。また同じ日に、本校がMOUを結んでいるテンプル大学日本キャンパスも訪問し、授業体験や、キャンパスツアーを、大阪女学院訪問団のために企画していただいたものに参加した。

#### F 新任教員支援事業

新任教員のなめらかな業務開始を支援する制度として、メンター制と対話型・体験型の新任教員オリエンテーションを実施した。一人の新任教員に、本校で経験のある教員から学校長が任命したメンターをつけ、新任教員はメンターとの対話を通じて、業務上の支援を得られる形として。

## (2) 生徒募集の状況

中学校

出願者数

国際特別 43名 前期 A 210名 前期 B 79 後期 187名

入学者193名

高等学校

出願者数

専願138名 併願83名

入学者133名

併願合格が21名（戻り率は25パーセント）

中学の出願者は119名で、前年度と比較して大きく増加し、募集定員を上回る入学者になりました。高等学校入試についても、専願、併願とも志願者が増え、入学定員を大きく上回る入学者数となりました。本校の広報活動は、全校専任教員が関与し、各地の説明会に出張して展開しています。それにより、本校に良い部分が、情報として地域受験生のところに届き、多くの方に志願いただいていると分析しています。

### 3. 【調査結果】

#### (1) 調査の方法と課題

調査は、Google Form によるアンケート形式で、生徒、教員、保護者様から回答を得た。分析の利便を優先し、自由記入欄も設けていないため、アンケート作成者の意図の外にある意見の集約はできなかった。また、生徒と教員は、入力する時間を設けたため、ほぼ全員に近い数の回答を得たが、保護者については、回答が 433 件で、全保護者のほぼ 3 分の 1 に相当する回答しか得られなかった。保護者の回答をいかに多く得るかが大きな課題であった。

#### (2) 分析

##### A 生徒による学校評価

##### 1. 全体的な傾向と学校への愛着

学校全体として、生徒の満足度は非常に高い水準にあります。

**学校への愛着 (質問 31) :** 「大阪女学院が好きか、誇りを持っているか」という問いに対し、総合計で 91.4% の生徒が肯定的 (思う・やや思う) に回答しています。特に中学 2・3 年生や高校 3 年生での肯定率が高く、学年が進むにつれて学校への帰属意識が高まる傾向が見て取れます。

##### 2. 施設の利活用と学習環境

学習環境については、項目によって評価に差が出ています。

**ICT 活用 (質問 2・13) :** ICT の運用が学習活動に役立っているかの問いには、総合計で 82.6% が肯定的です。授業や探究活動での情報収集に役立ったかという問い (質問 13) では 88.9% まで上昇しており、教育現場でのデジタル活用が定着していることが伺えます。

**空調設備 (質問 4) :** 総合計で 82.1% と概ね良好ですが、高校 1 年生 (71.5%) や高校 2 年生 (79.5%) では、中学各学年 (88%~91% 台) と比較して肯定的な回答が低くなっています。

**衛生施設 (質問 3) :** トイレや手洗い場などの機能面については、総合計 95.3% ときわめて高い評価を得ています。

##### 3. 教育活動と人権教育の成果

本校の特徴であるキリスト教教育や人権教育は、生徒の意識に深く浸透しています。

##### 人権・多様性の理解 (質問 18~21) :

社会問題 (人権) への意識向上 : **90.1%**

多様な性の理解 : **90.9%**

異なる文化や習慣をもつ人への理解 : **92.8%**

平和構築への意識 : **93.1%** 特に平和構築に関する意識は、中学・高校の全学年で非常

に高い肯定率を維持しています。

**国際理解と進路サポート（質問 15～17）**：国際理解教育（73.7%）や海外進路サポート（72.8%）も堅調ですが、言語教育の向上（81%）に比べると、専門的なプログラムについては学年によって捉え方にばらつきがあります。

#### 4. 学習支援と進路指導

**学習支援（質問 11）**：補習やスタディサプリなどの支援に対し、中学生（86.4%）に比べ高校生（76.7%）の方がやや評価が厳しくなる傾向にあります。

**進路指導（質問 25～27）**：必要な情報の提供については 90.9%が肯定的であり、特に高校 3 年生では進路指導全般において非常に高い満足度（93%～94%前後）を示しています。

#### 5. 生活指導と教職員との関係性

**生活ルールとコミュニケーション（質問 23・24）**：基本的なルールの遵守（95.4%）や挨拶等の実行（93.6%）については、生徒自身も高い規律意識を持って取り組んでいることが分かります。

**教職員のサポート（質問 28～30）**：困った時のサポート（81.5%）や教職員への相談のしやすさ（83.9%）など、対人支援面でも良好な信頼関係が築かれています。

#### 分析のまとめ

全体として、「人権意識の醸成」と「学校への高い帰属意識」が大阪女学院の大きな強みとして表れています。課題を挙げるとすれば、高校低学年における学習支援や空調設備への満足度が中学生や高 3 生に比べて相対的に低い点にあり、学年ごとのニーズに合わせた細やかなフォローが期待されます。

生徒から見た学校への全体評価は「教育理念への深い共感」と「高い帰属意識」に支えられた、きわめてポジティブなものであると言えます。

##### 1. 学校への強い愛着と肯定的なアイデンティティ

学校生活全般に対する満足度は非常に高く、多くの生徒が「大阪女学院生であること」をポジティブに捉えています。

**学校への愛着**：「学校が好き・誇りに思う」と答えた割合は全体で **91.4%に達しており、特に最高学年である S3（高 3）では 93%**（「思う」だけで 84.0%）と、卒業を控えた段階で非常に高い評価を得ています。

**生活指導への納得感**：基本的なルール遵守（95.4%）やコミュニケーション（93.6%）の項目も高く、学校の規律が無理強いではなく、生徒の自律的な行動として定着してい

ると評価されています。

## 2. 人権教育と国際理解に関する高い信頼

本校の教育の柱である「解放（人権）教育」や「国際理解」は、生徒の意識変容に大きく寄与していると高く評価されています。

**人権・社会意識の向上:** 多様な性の理解（90.9%）や社会問題への意識向上（90.1%）など、多くの項目で9割を超えています。

**平和への意識:** 戦争・紛争・平和に関する意識向上は\*\*93.1%\*\*と、教育内容が深く生徒の心に響いていることが伺えます。

## 3. 進路指導と教職員への信頼感

将来に対するサポート体制についても、生徒からは「自分たちを支えてくれる環境」として評価されています。

**進路情報の提供:** 進路選択に必要な情報の提供（90.9%）や、多様な入試制度への対応（91.4%）について、9割以上の生徒が満足しています。

**相談しやすい環境:** 教職員への相談のしやすさは **83.9%**、クラス担任不在時のサポートも 85.2%と、対人支援体制が安定していると受け止められています。

## 4. 学習環境（ハード・ソフト面）の充実

**施設の利便性:** 衛生施設（トイレ等）は **95.3%**、行事による能力向上は\*\*93.6%\*\*と、学校のリソースが有効に活用されていると評価されています。

**ICTの有効活用:** 授業や探究活動における ICT 活用（88.9%）も高く、現代的な学習ニーズに応えられているという評価です。

## 総評

生徒からの評価をまとめると、「自分たちの人間性を尊重し、将来に向けた確かな指針とサポートを与えてくれる場所」として、全幅の信頼を寄せられていると言えます。一方で、学習活動に役立つ施設（82.6%）や空調（82.1%）、土曜プログラム（69.4%）などの項目は、他の項目に比べると相対的に評価が落ち着いています。これらは「不満」というレベルではありませんが、生徒がさらなる改善を期待している、あるいは活用方法を模索している領域であると推察されます。

## B 保護者による学校評価

### 1. 学校の基本方針とキリスト教教育への支持

学校の根幹となる理念について、保護者から極めて高い評価を得ています。

**建学の精神と教育方針:** 質問1において、本校の教育方針が適切であると答えた保護者

は全体で 97.6%に達しています。

**キリスト教教育:** 礼拝やキリスト教プログラムが生徒の精神性を深めているかという問い（質問 2）に対し、95.5%が肯定的です。

**人権・平和教育:** 解放（人権）教育を通じた差別問題への意識向上（質問 12）は **97.1%**、戦争や平和に対する意識向上（質問 15）は 98.2%と、保護者のほぼ全員がその教育的意義を認めています。

## 2. 学習・進路指導への信頼

保護者は、学校の学習環境や将来へのサポート体制を高く評価しています。

**学習指導と ICT:** 教科カリキュラムへの満足度は **94.8%**（質問 3）、ICT（Chromebook や Wi-Fi 等）が学習に役立っているとの評価は **95.3%**（質問 7）と、学習インフラへの信頼も厚いです。

**進路サポート:** 多様な進学制度への対応（質問 18）は **94.7%**、進路情報の提供（質問 17）は 93.5%と、高水準の評価を維持しています。

**土曜プログラム:** 生徒アンケートでは評価が分かれやすい傾向にありましたが、保護者視点（質問 4）では 90.3%が探究心の向上に役立っていると回答しています。

## 3. 生活指導と教職員の対応

学校での安心・安全面や、教職員の姿勢についても良好な評価結果となっています。

**生徒へのサポート:** いじめや人間関係、成績不振などに対する学校のサポート（質問 16）は 91.9%が肯定的です。ただし、いじめが発生した場合でも、その被害件数は極めて少ないため、上述の通り 3 分の 1 の保護者からしか回答を得られない実情にあっては、これらの意見を反映されていない可能性が大きいと考えられます。

**教職員の対応:** 教職員の姿勢や対応（質問 21）については、96.3%の保護者が適切であると回答しています。

**施設の維持管理:** 衛生施設（質問 5）や空調設備（質問 6）も 94%以上の高い評価を得ており、学習環境の整備に対する不満は非常に少ないことが伺えます。

## 4. 学校と家庭の連携

**情報発信と広報:** 学校からの情報発信（質問 19）は 97.4%、学校ホームページや広報誌（質問 20）は 97.6%と、コミュニケーション面でも高い満足度を示しています。

最終的な評価として、保護者が大阪女学院に娘を通わせていることへの満足度は圧倒的です。

- **学校への満足度（質問 22）:** 「お子様を本校に入学させて良かったと思いますか？」という問いに対し、\*\*全体で 98.4%\*\*の保護者が「思う・やや思う」と回答してい

ます。

- **学年別の傾向:** 中学 (J1-J3) では「思う」の回答が **80%~90%台**と非常に高く、高校(S1-S3)でも継続して高い水準を維持しています。特に J2(99.3%)や S3(99.1%)では、ほぼ全ての保護者が入学に満足しているという結果が出ています。

### 分析のまとめ

保護者アンケートの結果からは、「教育理念の共有」「学習・進路サポートの充実」「家庭との良好な連携」という 3 つの柱において、学校側が保護者の期待に十二分に応えている現状が浮き彫りになりました。生徒自身の評価 (約 91%) よりも保護者の評価 (約 98%) の方がさらに高いという傾向は、学校の教育成果が家庭にも明確に伝わっている証左であると言えます。

保護者のアンケート結果に基づくと、保護者からは「教育理念と実践が高度に一致した、極めて信頼の厚い学校」として評価されていると言えます。これは、以下の 4 つのポイントに集約されます。

#### 1. 学校教育への「信頼」

「娘をこの学校に入学させて良かった」という回答が全体で 98.4%に達している点が着目されます。これは、学校が掲げる方針と実際の教育活動に対し、保護者が疑念を持たず、高い満足度を抱いていることを示しています。

#### 2. 独自の「教育的価値」への強い共感

単なる学びやとしての評価だけでなく、本校独自の教育プログラムへの支持が際立っています。

**人権・平和教育:** 差別問題や平和構築に関する意識向上への評価は 97%~98%を超えており、知性だけでなく「心」や「価値観」を育てる場として高く評価されています。

**キリスト教教育:** 礼拝などのプログラムが精神性を深めているという点にも 95.5%が同意しており、学校のアイデンティティが保護者にも深く受け入れられています。

#### 3. 安心・安全な「成長の場」としての評価

**手厚いサポート:** 人間関係の構築、成績不振への対応(91.9%)や、教職員の姿勢(96.3%)への評価が高く、多感な時期の子を安心して預けられる環境だと認識されています。

**環境整備:** ICT 設備 (95.3%) や衛生施設 (94.6%) など、ハード面での整備も行き届いていると評価されています。

#### 4. 緊密な「家庭とのパートナーシップ」

**透明性の高い運営:** 学校からの情報発信やホームページの運用に対し、97%以上の保護者が満足しています。学校での様子が家庭に可視化されており、学校と家庭が同じ方向

を向いて生徒を支える体制ができていると言えます。

## 総評

保護者からの評価を総括すると、「大阪女学院という教育環境そのものが、子の人生にとって最良の選択であった」という確信に近い高い評価を得ています。生徒自身の評価（約91%）をさらに上回る保護者の満足度（約98%）は、学校の教育努力が家庭での対話や生徒の成長を通じて、保護者にしっかりと還元されている結果だと言えるでしょう。

## C 教員による学校評価

### 1. 教育理念とキリスト教教育の推進

教職員は、学校の根幹となる理念の共有と実践に非常に高い評価を下しています。

**教育方針の適切性:** 本校の教育方針が適切であるという問いに対し、**100%**（「思う」84.4%、「やや思う」15.6%）の教職員が肯定的です。

**キリスト教教育の実践:** 礼拝やキリスト教プログラムが生徒の精神性を深めているかという点についても、100%が肯定しています。

**建学の精神の理解:** 生徒が建学の精神や方針を理解しているかという問いには、97.8%が肯定的であり、理念の浸透を実感しています。

### 2. 人権教育への確信

人権・平和教育は、教職員が最も自信を持って評価している領域の一つです。

**多面的な意識向上:** 社会問題(97.8%)、多様な性(97.8%)、多様な人々への理解(100%)といった全ての項目で、極めて高い肯定率を記録しています。

**平和教育:** 戦争や紛争、平和構築に対する生徒の意識向上についても、100%の教職員がその成果を認めています。

### 3. 学習・進路指導体制

教育活動の質についても、教職員は概ね高い自己評価を行っています。

**カリキュラムと学習支援:** 教科カリキュラム(95.6%)や学習支援体制(95.6%)が、生徒の意欲や自主性をサポートできていると考えています。

**ICTと施設:** 施設が学習活動に役立っている(97.8%)、ICT活用が役立っている(95.6%)と、環境面への評価も高いです。

**進路指導:** 情報提供や多様な入試への対応、モチベーション向上についても、93.3%～97.8%と高い肯定率を示しています。

### 4. 生徒支援と組織運営

**生徒へのサポート:** 困難を抱える生徒へのサポート体制（93.3%）や、生活指導のルール（93.3%）についても、有効に機能していると評価されています。

**教職員間の連携:** クラブ活動等への顧問のサポート（91.1%）や、担任不在時のクラスサポート（95.6%）など、組織的な対応力への肯定感も高いです。

**広報と情報発信:** 学校からの情報発信（100%）や広報活動（100%）についても、全教職員が適切であると回答しています。

## 5. 教職員による自校評価の総評

最終的な設問である「大阪女学院を良い学校だと思いますか?」という問いに対し、教職員の100%（「思う」91.1%、「やや思う」8.9%）が肯定的に回答しています。

### 分析のまとめ

教職員のアンケート結果からは、「教育理念への絶対的な自信」と「組織的な教育実践への高い納得感」が鮮明に表れています。

**強み:** キリスト教教育、人権教育、広報活動、および学校全体の質については、教職員間でほぼ100%に近い合意形成がなされており、揺るぎない教育基盤を構築していると自負しています。

**相対的な課題:** 多くの項目が90%以上ですが、唯一「土曜プログラムが探究心の向上に役立っているか」という問いが\*\*86.7%\*\*と、他の項目に比べればわずかに慎重な評価となっています。これは生徒アンケートの結果とも相関しており、さらなる内容の精査や改善を意識している現れかもしれません。

教職員は、生徒や保護者以上に「自校の教育力」を高く評価しており、プロフェッショナルとして自らの教育実践に強い誇りを持っていることが分かります。

教職員アンケートの結果に基づき、教職員が自校をどのように捉えているか、「評価の高い部分」と「課題・不足している部分」に分けて総評をまとめます。

教職員の視点は、現場を運営する当事者としての「教育内容への強い自負」と、経営・組織運営面での「シビアな現状認識」が共存しているのが特徴です。

### 1. 評価の高い部分（学校の強み）

教職員は、大阪女学院の「教育の質」と「アイデンティティ」に対して、揺るぎない自信を持っています。

**教育理念の体現と浸透:** 教育方針の適切性やキリスト教教育の実践、建学の精神の生徒への浸透については、ほぼ100%の教職員が肯定しています。自分たちが提供している教育の根幹が正しいという強い確信が見て取れます。

**人権・平和教育の圧倒的な成果:** 多様な性の理解、社会問題への意識、平和構築へ

の取り組みなど、人権教育に関する項目は軒並み 100%近い評価です。これは、単なる知識伝達に留まらず、生徒の価値観を育む教育が組織的に成功しているという自己評価の表れです。

**広報・外部発信の充実:** 学校からの情報発信や広報活動、募集対策についても全教職員が適切だと回答しています。学校の魅力を外部に伝える広報戦略が、学内でも高く支持されていることが分かります。

**生徒への進路・生活サポート:** 進路指導や、困難を抱える生徒へのサポート体制も 9 割以上の高い評価です。生徒一人ひとりに寄り添う指導が、教職員間の共通認識として徹底されています。

## 2. 不足している部分（今後の課題）

一方で、運営の舞台裏や特定の教育プログラム、組織の風通しについては、改善の余地があると感じている教職員が一定数存在します。

**財務・資産運用の不透明感:** 「収支の健全性（肯定 50%）」や「施設修繕費用の積み立て（肯定 46.7%）」、「寄付金のアピール（肯定 40%）」など、財務に関する項目は肯定率が低く、「あまり思わない」「思わない」という否定的な見解が約半数を占めています。経営基盤の安定性や情報の透明性に対し、現場が不安や課題を感じていることが伺えます。

**教職員間のコミュニケーションと組織力:** 「教員間で助け合って取り組むことができたか」という問いへの肯定計は 64.4%に留まり、約 35%が否定的な回答をしています。また「いじめ未然防止への意識的な取り組み」も 72.9%と他の項目より低めです。多忙さや組織の壁により、緊密な連携が取りにくい現状が推察されます。

**社会課題への新たな提案力:** 「社会の課題に対して特色を活かした取り組みを提案・アピールできているか」という問いは 72.9%です。伝統的な教育には自信がある一方で、変化する社会に合わせた「新しい一歩」を打ち出すことへのハードルを感じている層が一定数います。

**土曜プログラムの再検討:** 生徒・保護者アンケートでも評価が分かれた「土曜プログラム（肯定 86.7%）」は、教職員の自己評価も他の教育活動に比べるとやや低めです。内容のマンネリ化や、本来の目的である「探究心の向上」に結びついているか、見直しが必要な時期にあると言えます。

## 総評

教職員から見た大阪女学院は「教育理念と人権教育の質においては他校に誇れる絶対的な強みを持つ一方で、経営の透明化と学内の組織コミュニケーションに課題を抱える学校」と評価されます。

教職員自身が学校を「良い学校だ」と 100%確信している（質問 32）からこそ、その教育活動を支えるためのバックオフィス機能（財務・施設管理）の強化や、教職

員がより一体感を持って動ける体制づくりが、さらなる学校発展の鍵になると分析  
できます。